
夜が明ける方角

tokyo town pages

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜が明ける方角

【Nコード】

N3115BA

【作者名】

tokyo town pages

【あらすじ】

玄関のドアを開けるとき。

地下鉄の階段を上がって地上に出たとき。

朝起きてカーテンをそつと開け、窓から空を見上げたとき。

薄暗い場所から陽のあたる場所に一歩踏み出したとき、

人はどうしてほつとするのでしょうか。

そんな人の心の震えを、とても短い文章の中で表現しました。

まだ残暑厳しい9月の、雨降る朝方のことである。

その築10年を優に越えるアパートの部屋の窓とカーテンは全て閉めきられ、今すぐに降参して白旗を振りたくなるような気だるい熱と、皮膚表面から体内にまで侵食してきそうなほどの嫌な湿気と、わずかなコーヒーの香りが、誰にも伝わることがないと分かっているながらも放り投げられた言葉のように、ゆらゆらとその空間を構成していた。

薄暗いその部屋の中で青年は、がさごそとりモコンを探し当て、エアコンの電源を入れた。

ごうごうと空気を押し流す異音がしばらく鳴り響き、やがて熱と湿気がおさまると、青年は飲みかけのコーヒーをひとくち胃に流し込み、

「雨の降る日は、人と人が解り合うことは難しい」と、壁に語りかけた。不規則に小さな膨らみが並んでいくつも陰影をつくる、白い壁紙であった。

「頭上に広げた傘の大きさのぶんだけ、人と人との距離がひらいてしまうから」

青年は自身の吸うタバコのせいでわずかにくすんだその白い砂丘から視線を外さずに語ると、もうひとくちコーヒーを飲み、部屋のカーテンを開けた。

雨はいつの間にか体当たりをしながら響かないコードを鳴らすのをやめ、地面に横たわりながら鈍い光を反射していた。

まだ暗く重たい雲のずっと向こう側から僅かな光が差すのを確認すると、青年は、どこか遠くの知らない場所で名前も知らない男の子が、カブトムシを捕まえたと言っている声を聞いたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3115ba/>

夜が明ける方角

2012年1月8日01時47分発行